

死ぬまで寝たきりにならない させない 介護術

週刊神日

独自調査で判明
日本企業は
「中国なし」で大丈夫

北原みのり
鳥取・男性不審死
裁判傍聴記

半年で39キロ減も!
朗読ダイエット

スクープ

大間原発
原子炉下に活断層

10|12
2012
370円

キーファー・
サザーランド

自民と対決姿勢鮮明に

橋下徹は

安倍嫌いだった!

和服に下駄、カウボーイハットという何ともミスマッチな格好で買い物客を集めた



人生に
乾杯！

49

吉田潤喜

逆境を跳ね返し、エネルギーにしながら生きてきた。
3歳で右目の視力を失い、少年時代はケンカに明け暮れた。
「強いアメリカ」にあこがれ、19歳で単身渡米、極貧生活に耐える。
空手道場の生徒へのお礼に自家製のソースを贈った。
このお袋の味が受けて、アメリカンドリームを実現した。

商いは、その日その日のケンカ。
精いっぱい生きることや

19歳で単身渡米、時給1ドル25分の極貧生活から億万長者になった。アメリカカンパニーをかなえた「ヨシダソース」の創業者、吉田潤喜さんは「アメリカでイチローの次に有名な日本人」と言われる。トレードマークは、大きなカウボーイハットとコテコテの関西弁、人なつこい笑顔だ。

「商い」って生きものやろ。MBAの勉強して成功するなら、みんな金持ちになつてくるわ(笑)。MBAなんていうものは所詮、統計学なんや。統計学が成功の万能薬やったら、高校野球、みんな優勝しとるワ。統計学も大事やけど、もつと大事なもの、エネルギーなんですわね。お前、本当に死ぬほど自分の夢を信じてるんか、と。

そして、突っ走ったときには、100%のバッシュオンを出さないとあきまへん。99%でもだめ。99と100の違いは、ゼロと100なんですわ。おれかて、1%の逃げ道をつくっていたこ

ともあった。だから会社が4回もつぶれかかった。そのたびに、「くそー、今にみとれよ」と、悔しさをポジティブなエネルギーに変えてきたんや。ポジティブ・リベンジやな。

死ぬほど信じていて、死ぬほど欲しかったら、体からエネルギーが発散して、周りの人間が巻き込まれてくるんや。朝から晩まで、死ぬ思いで、おれはこれやりたい、これで成功したいと言っていたら、気がついたら手に入つとるんや。

縫い針が刺さり 3歳で右目失明

7人きょうだいの末っ子として京都で生まれた。芸術家肌の父に代わり、母がマージャン店や焼き肉店などを経営し一家を支えた。

姉さん5人に便所一つやで。女が5人もいたら、まず自分の番は回ってこない。子供のころは、そりゃあ、にぎやかやった。

お袋は子供7人育てるた

めに、朝昼晩、商売して、夜中は裁縫の内職してた。姉さんがお袋のそばで針を持つて遊んでいたところに、おれが走り回って、針がおれの右目に突き刺さつた。3歳のときや。目は真

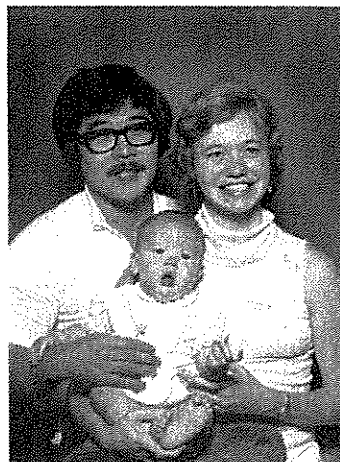
ん中に刺さると、血が出ないそうや。ワーツと泣いてそのまま寝たらしい。気がついたときには手遅れやった。何かをつかもうとしてもつかめへん。

お袋は自分の責任やと悩んで悩んで、「自分の目を潤ちゃんにあげてくれ」と泣いて何度も神様にお祈りしとつたワ。将来は嫁さんもらえないかもしれないつてな。昔の日本では、カタワもんと言われて、当たり前のように差別されていたからなあ。

みんなに片目、片目と言われて、「なにくそ」と思つて少年時代はケンカ、ケンカで明け暮れてな。「悪」は京都の言葉で言うところ「ゴソ」や。京都市南区ではゴソ者で有名だった。中学、高校では、ますます空手に

打ち込んだもんや。1969年、大学受験に失敗したのを機に単身渡米。家族はみな反対したが、母だけは味方だった。コソコソためた貯金と、足りない分は「頼母子講」で近所からお金を借りて、渡航費用を工面してくれた。

ケンカばかりしていたから、強いものにあこがれたんやな。東京オリンピックやキューバ危機があつて、アメリカにあこがれた。立命館大学すべつて、どないしようかなと思つたときに、そうや、アメリカに行こうと。大学の受験料は5千円。アメリカに行つて5千円以上のものを取り返してやろうと思つた。



妻のリンダさん、長女のクリスティーナさんと一緒に。1974年



よく遊んでもらつた大好きな姉と。目の話は、大人になるまで姉とはしなかつた



7人きょうだい(兄と5人の姉)の末っ子として京都市で産声をあげた

人生に乾杯!

さまざまなユニークな扮装でテレビCMや雑誌広告に登場し、評判になった



空手道場のほか、オレゴン州、ワシントン州の警察で逮捕術も教授した

お袋のほうは、ケンカばかりしているゴンタ者が浪人して悪い道へ行くよりはと思っただろう。アメリカ行きを応援してくれた。往復の渡航費用は1300ドル、日本円で40万円以上だった。下手したら、当時のサラリーマンの1年ぶんの給料やで。それを必死で工面してくれた。

アメリカへ渡っても、当然、日本から仕送りはまったくない。今思うと、助けがなかったから生きていけないんだな。

「成功するまで帰らない」と心に決め、帰りの航空券はすぐ現金に換えた。芝刈

りなどのアルバイトを重ね、移民局に不法滞在で2度捕まった。強制送還を免れるため、シアトルのコミュニティカレッジに入学。そこで妻となるリンダさんとの出会い、周囲の反対を押し切って結婚した。

学内で一目ぼれして、プロポーズした。金髪の女性と結婚できてヤッターと思っただけ、髪は染めてやがった。以来39年間、たぶん他にもいろいろだまされてるわ、ハハハ。

義父のブーマーさんは、元ネービーで、第2次世界大戦で日本と戦った経験もあったから、「なんでよりによって日本人なんだ」と、結婚には大反対だった。やっと許しが出たのは半年後や。でも、「息子」とは決して言ってくれなかったな。

娘も生まれたので、稼がないとあかん。当時のアメリカはベトナム戦争の真っ最中や。70年ごろにブルース・リーをきっかけに、カンフーブームや空手ブームが起こっていた。おれは賞

金を稼ぎたくて空手トーナメントに出ていた。大学の体育の授業で空手が採用されていたから、先生の助手をしたりして、このまま空手で生活できるんじゃないかと思うようになった。

シアトルの郊外に家賃の安い小さな物件を見つけ、空手道場を開いた。大学でも正式に教えだして、大学からのついででワシントン州の警察学校の教官にもなつて、「ヨシダ・メソッド」という逮捕術ができたのよ。おれ、そういうホラはめっちゃくちゃうまかったから。それからオレゴン州で空手道場を開いていた仲間が亡くなつて、その空手道場を引き継いだ。

お袋の味のソース 手作りして贈る

77年に米国籍を取得。道場の生徒も増え、暮らしも安定しつつあったところに苦境が訪れる。80年代初頭、レーガン政権時代の深刻な不況だ。警察学校や大学の授業は半減し、道場の生徒数も半分以下になった。

生徒のみんなが、クリスマスにたくさんプレゼントをくれるんだよね。ありがたくて、お返ししたいと思っただけ、そんな余裕はない。どうしたものかと考えていたとき、うちのお袋のソース（たれ）を思い出したんや。

お袋が焼き肉屋をやっていたときに、しょうゆ、みりん、砂糖などを8時間煮込んで焼き肉のたれを作ったの。それをみんなにプレゼントしようってね。味を思い出しながら作って、瓶詰めして、リンダがリボンをつけてくれて、みんなに配った。これが大好評。みんなが「おいしかった。もつとないか」と言うので、また作ってあげたりしているうちに、「お金を払ってでも欲しい」と言われるようになった。それで、変な気を起こしたのよ。「これ、商売になるんちゃうか」って。道場の地下室に中古で買った大がまを持ち込み、ソ

ース作りに打ち込んだ。ぐつぐつ煮込んで、1本1本瓶詰めしてな。

早速、スーパーにお願いで店頭で試食販売をさせてもらうことにした。日本ではよくある試食販売も、

当時のアメリカでは珍しく、だれもサンプルに手を出さずとしない。みんな通り過ぎていくんや。どうしたらええやろ、と考えて、店頭に立ったときにパフォーマンスを始めた。着物を着て、カウボーイの帽子かぶって、ゲタはいて、大声を出したんや。京都の商店街のように、「よつてらっしゃい、みでらっしゃい！」や。

足を止めてくれた客に、「ワシには子供が12人おつて、おなか空かせて待ってるんです！」売れんと、プスで怖い奥さんが、家に入れてくれまへんねん」とか、でまかせを大声で言つてな。そしたらみんなニコニコ笑いだしよつたん。笑つてくれた人はサンプルを食べてくれた。食べてくれた人は7割が買つてくれた。

エルビス・プレスリーの格好したり、パレリーナの格好したり、やるたびにコスプレを変えていったよ。

現地の新聞などで「クレージー・ヨシ」と取り上げられ、知られるようになってからは、他のスーパーもソースを置いてくれるようになり、そのとき思った。商いは目立ってなんぼやと。知つてもらうためには、恥ずかしいとか、みっともないとか言うてたらあかん。

「息子よ」と手を差し伸べてくれた

大手スーパーマーケットチェーンなど取引先も増え、生産を増やすために設備投資をし、パートを雇い、ラジオCMも打つた。ところが、売上げは思うように伸びず、銀行からの借入金返済に行き詰まり、経営危機に陥つた。

倒産一步手前まで追い詰められて、やけ酒飲んでたら、リンダがウイスキーのボトルを持って立っている

んや。殴られるのかと思つたら、「これを飲んで、明日は家を売つて安いアパートを探そう。また一からやり直せばいいじゃない」つて。

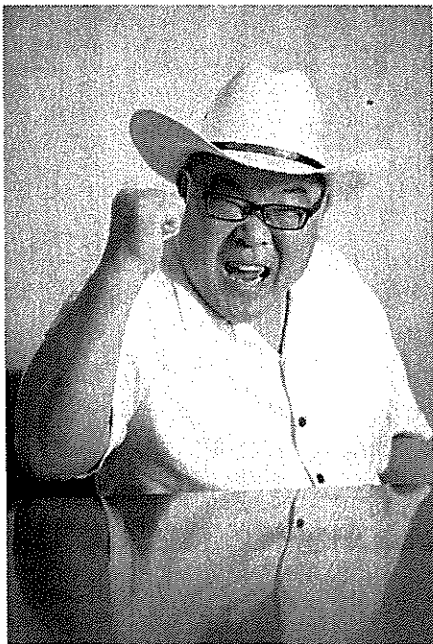
その夜、義父のブーマーさんがやってきた。てつきり娘と孫を取り返しにきたのかと思つたら、「これを使え」と16万ドルの小切手を差し出されてな。30年以上まじめに航空会社に勤め、老後のためにコツコツためた全財産だよ。

そんなの受け取れないつて言つたら、「マイ・サン(息子よ)」つて、初めて息子と呼んでくれたんや。ありがたくてね。「くそ、絶対にお返ししたる！」と心に誓つたよ。そうして、必死でアメリカにヨシダソースを広めていった。

その後何度が危機はあった。バブルのころにゴルフ場と住宅の開発を手がけようとして、日本人投資家と一緒に多額の投資をしたものの、バブルがはじけ、もはやこれまでか、と思つたこともある。でも、やつ

ぱりお世話になつた大勢の人たちのためにも絶対に逃げちゃいけない、と思つて踏ん張つたな。

ヨシダソースは現在、世界15カ国で販売されている。航空貨物、リゾート開発、不動産業などグループ会社は18社。年商250億円を

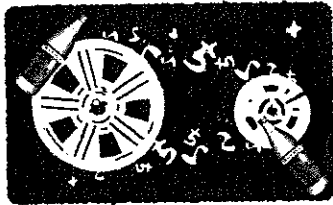


よしだ・じゅんき 1949年 7人きょうだいの末っ子として京都市に生まれる。69年 大学受験失敗を機に、単身渡米。71年 シアトルの郊外で空手道場を開設。73年 リンダさんと結婚。翌年、長女誕生。77年 米国籍を取得。81年 道場の生徒たちからのクリスマスプレゼントのお返しができず、母の味のソースを贈ったところ、大好評。82年 ヨシダフーズ・プロダクツを設立、ソースの製造販売開始。2003年 米国中小企業局選定の全米優良中小企業24社に選ばれる。現在、ヨシダグループ会長兼CEO、オレゴン州知事経済顧問、子供がん協会理事、全米空手道連盟理事などを務める。



「映画を観てきたよ。ここんとこ、古い映画にはまっちゃつてね、今日も小さな劇場の上映会に行ってきた」

駅裏の赤ちょうちん。カウンターの隣りに座ったMさんが辻機嫌で言った。「誰かのセルフじゃないけど、いやあ、映画観ていいよね」



「子供の頃、小学校には『映画教室』みたいな時間があったね」

カラカラと水割りをつくりながら、Mさんは楽しそうに話しはじめた。

「学校の講堂に集まって、みんな観るんだ。映画の内容はあらかた忘れてしまったけど、上映の日のワクワク感はよく覚えてる。

そうそう、町の映画館まで4~5キロの道を、みんな歩いて観に行ったこともあったなあ。文部省推薦のような映画だね、ひとつ覚えているのは『風船旅行』みたいな作品だった。

でもオレは、なぜか映画館が怖くてね、観終って明るい場所に出ると、世間というか、世界が変わってしまったような、妙な恐怖感に襲われたなあ。家にいるはずの母親のことが急に心配になったりした。あれは一体何だったんだろう。

だから大人になっても、それほど映画館って行かなかった。評判の映画が掛かっても、何となく無関心だった気がするなあ。…ところが、ところが…」

ツイと水割りを飲み、Mさんは少し意気込んでつづける。

「ある時、志半ばで戦死した監督の作品というのを観たんだ。哀感が漂うもので、映画ってしみじみいいなあって思った。もうオレの楽しみは映画だね。映画ジジイでいっよ」

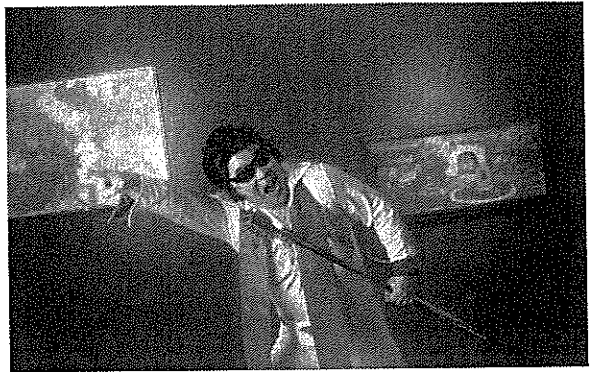
焼酎のよさをさらに磨き込んだ、透明な味わい

リチコ

醸造元 三和酒類株式会社
大分県宇佐市山本・虚空蔵寺丁
TEL0978-32-1431 <http://www.lichiko.co.jp>

飲酒は20歳を過ぎてから。お酒はおいしく適量を。妊娠中や授乳期の飲酒は、胎児・乳児の発育に影響するおそれがありますので、気を付けましょう。飲酒運転は、絶対にやめましょう。

全米で流されたテレビCMの一コマ。プレスリーのモノマネをしてソースをPR、話題になった



超える。2003年、インテルやフエデックスなどとともに全米優良中小企業24社に選ばれ、05年にはニューズウィーク日本版で「世界が尊敬する日本人100」に選ばれた。地域や慈善団体、病院などに多額の寄付をしている。

何カ年計画とかよく言うけど、おれはやっぱり、商いはその日その日のケンカやと思つとる。その日、精いっぱいソースを売つたのか。その日、死に物狂いで生きたのか。今日一日のケンカが人生を開いていくんやな。人生も商売もケンカ。それを忘れたらあかん。

頭ええやつほど、計画を立てて、細かいこと調べてやるうとする。リスクマネジメントとか言つてね。リスクなんてあんなもん、マネジメントするもんどちゃう。考えてると怖くなつて、やっぱりやめとこかな、つてなるよ。自分の夢を信じて、その勢いで突っ走れや。そうすれば最低でも後悔しない人生が残りますがな。人間として生まれてきて、後悔するんが一番イヤやで。

現在はグループの会長を務める傍ら、米国の料理番組にレギュラー出演したり、各地で講演したりして、世界中を飛び回っている。東

日本大震災の際には精力的に支援し、被災地でチャリティ講演をたびたび開催している。

行き詰まったとき、チャンスは訪れる

講演では、生き馬の目を抜くアメリカで4回もつぶれかけた男の話を聞いてもらいたいと思つているのもっともつとろんな人とお会いしたい。どろどろの人生を知つてもらうて、みなさんに燃えてもらいたいんや。自分のパッションを伝えたいし、みなさんにもパッションを持つてもらいたい

い。それがこれからのおれのミッションだな。

右目の視力を失つたからゴンタ者になって、アメリカを目標した。空手道場の経営が傾いたとき、ソースがひらめいた。

人間、生きていけば必ず不幸に出会う。目の前の扉がびしゃっと閉まる。その扉の前でわめいたり、だれかのせいにして恨んだりしていてもしょうがないんや。扉がパシッと閉まつたら、必ずどっかで別の扉が開いとる。何か不幸が起こったとき、せつば詰まったときに、チャンスが訪れるんや。

本誌・友澤和子